

東アジアにおける「生態環境文学」の視点から 振り返る日本の平和絵本

—— 災害・公害・戦争・核に取材した作品から

Analyzing Japanese Picture Books on Peace from 'Ecological Literature' in East Asia

—— Disaster, Pollution, War, Nucleus

大竹 聖美

1. はじめに

中国や韓国など、東アジアの漢字文化圏では、「生態文学」あるいは「生態環境文学」という概念が一般化している。特に韓国では公害・核問題など人間の生存自体を脅かす危機や自然環境を破壊する文明の問題を批判する文学として近年大変活発な動きを見せている。

韓国の文学は、1980年代頃から朝鮮半島が北と南に分断された状況を批判する「分断文学」や、南北分断を背景とした軍事独裁政権と財閥・既得権者による経済開発中心の開発独裁社会を批判する「労働文学」などにその特色が見られたが、2000年を超えてからは、「生態文学」が活発になった。2011年には『赤色から緑色へ』¹という「生態文学批評集」が刊行されており、この本のタイトルに象徴されるように、韓国の文学および社会は民主化と経済の進展とともに、かつてのイデオロギー中心からパラダイムシフトしたといえる。2000年以降の韓国では、環境意識や市民意識の成熟とともに「生態文学」が流行したのである。

筆者は、2017年5月に、大韓民国昌原市が主催する「世界児童文学フェスティバル」²における世界児童文学シンポジウム「東アジア児童文学の現況と交流方案」にパネリストとして招聘され中国や

韓国の研究者との討論に参加した。そこでは主催者から「生態児童文学」をテーマに提示されたため、「일본의 생태아동문학——생태계 파괴(재해, 오염, 전쟁)를 취재한 작품들에서 (日本の生態児童文学——生態系破壊(災害、汚染、戦争)に取材した作品から)」として主として韓国語人の聴講者を想定して日本の「生態児童文学」について韓国語で発表した。

「生態児童文学」とは、韓国語をそのまま漢字にしたものである。中国でもこの語は通用する。中国や韓国では一般化された概念であり、文学ジャンルと言ってもよい。しかし、日本では使われない用語と言ってもよいだろう。筆者が初めて「生態児童文学」という語彙を目にしたのは、2002年に大連で開催された「第6回アジア児童文学大会」においてであった。筆者は韓国語論文の日本語訳を担当したが、「生態児童文学」を環境やエコロジーをテーマとした児童文学、というように訳出したと記憶している。それだけ日本語として「生態児童文学」というのは異質感があったということである。

「生態児童文学」という概念で日本の児童文学を振り返り、それを東アジアに向けて発信することを考えたときに、筆者は、やはり日本は原子力発電、原子爆弾、公害、災害すべてにおいて東アジアで最初に甚大な被害を経験している国であること、そしてそれだけ作品も多数あるということに触れざるを得なかった。

日本においては、いわゆる<3・11>以降の児童文学と、それ以前の児童文学ではその特徴を大きく分けることができ、特に1980年代までは、やはり空襲や原爆、水俣、公害の悲惨さを強烈に訴える作品が国内の一般読者には読まれており、それらは人類の共生や自然界の調和が破壊されることの悲惨さを見せつけながら「反戦平和」を訴える作品群であったところに特徴がある。日本では、「生態児童文学」ではなく、「平和の絵本」「反戦平和の児童文学」など

で分類される作品群である。そして、2010年代、〈3・11〉以降の作品では、自然破壊の悲惨さもさることながらその渦中に生きる人々の「希望」や「絆」が強調される作品群が誕生してきている。

こうした日本の児童文学の動向について、韓国において〈東アジア児童文学〉として発信する際にはさらに留意すべき点がある。なんといっても韓国や中国の人々にとって第一の関心事である日本が原因であるところの、東アジアにおける戦争被害、人権侵害、文化破壊についてどのように言及すべきか、そして、そもそも日本国内においてそのような視点の作品はどのような位相にあったのか、そしてそのことについてどう言及すべきか、という点である。そこで、筆者は、筆者もプロジェクトの一員として参加している「日中韓平和絵本シリーズ」（童心社、2011～。2017年現在、全12冊刊行予定中10冊刊行済み）³についてまず始めに触れ、それから、1970年代の日本の社会的状況を説明しながら、慎重にその当時よく読まれた代表的な日本の平和絵本を紹介するという手順で発表をすすめた。以降、2017年5月の韓国・昌原市における「世界児童文学フェスティバル」、世界児童文学シンポジウム「東アジア児童文学の現況と交流方案」での発表をもとに、日本の「平和絵本」あるいは「生態環境児童文学」と見なすことのできる絵本群について述べたい。

2. 平和絵本

日本においては、従来から、〈平和の絵本〉とあえて括弧でくくられる作品は、「平和な状態そのもの」が描かれた絵本ではなく、「平和な状態が壊された」内容が描かれているものであった。具体的には戦争が描かれた絵本であり、つまり〈反戦絵本〉として平和の価値を訴えているものであった。例えば、『かわいそうなぞう』（金の星社、1970）、『ガラスのうさぎ』（金の星社、1977）、『ひろし

まのピカ』(小峰書店、1980)などである。

日本、中国、韓国の作家と出版社が協力して立ち上げた「日中韓平和絵本シリーズ」のプロジェクトも、同様に東アジアの平和な状態や東アジアの生態系の調和の美しさが描かれているものではなく、過去の戦争とそれによって引き起こされた人権侵害を描いたものである。これは、近現代の東アジアの現実を表したものにほかならず、こ

とに、中国や韓国の作家の作品には、これまで見慣れてきた日本の<平和絵本>とはまるで異なる、全く新しい角度からの強烈な訴えがあり表現があった。つまり、日本の平和絵本に描かれていたのは、空襲であり、原爆であり、日本人が受けた戦争被害であったのに対して、中国や韓国の作家が描いたのは、日本軍による爆撃と文

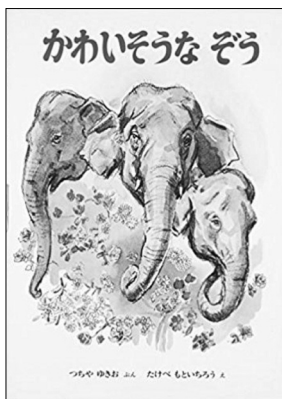


図1『かわいそうなぞう』1970



図2『ガラスのうさぎ』1977



図3『ひろしまのピカ』1980

化消失、慰安婦の絶望、郷里を失い漂う避難民や離散家族であり、現在に続くディアスポラと分断の現実、回復されていない人間性という生々しい痛みであった。

これは日本人として非常に衝撃的であったが、改めて突きつけられた歴史の姿であり現実であった。本シリーズは、東アジアの共生と平和を考えるうえで非常に意義深い企画である。

筆者は、1970～80年代の日本で、いわゆる〈平和教育〉を受けた世代である。民主主義と平和の価値が学校教育において強調され、平和に関する児童文学や絵本が推奨された。しかしながら、主力を注いで刊行され広く読まれた作品の内容は、広島・長崎に投下された原爆や東京大空襲に関するものがほとんどであった。原爆投下の背景には日本の政治や軍事行動によって侵略され人権を侵害された東アジアの人々がいたという歴史的事実を描いた児童文学作品や絵本はほとんど知られず、読まれてこなかった。

日本国内においても、日本の加害の歴史を描いた作品が読まれていないことについて、意識の高い児童文学者は長らく批判し続けている⁴。しかしながら、そうした意識が一般の読者にまで共有されていたとは言いがたい。筆者は、「日中韓平和絵本シリーズ」が、完成度の高い作品群として一定の重みを持って存在し、日本の読者が東アジアの隣人たちと痛みを分かち合いながら共生にむけて希望を抱き前向きに歩いていくことを抱くことを望んでいる。

1930年代の日中戦争で中国の古都が受けた甚大な被害について描かれた絵本はこれまで皆無であったし、朝鮮戦争や、朝鮮半島の分断の現状、被爆した在日朝鮮人二世を描いた絵本も皆無であった。「日中韓平和絵本シリーズ」を通して、朝鮮戦争と南北分断の現状や在日朝鮮人被害者の存在を初めて知る日本の子どもは相当数に上ると思われる⁵。また、慰安婦を描いた絵本⁶は、日本ではいまだに

翻訳出版が実現されていない。それほど、本シリーズに収められた中国や韓国の絵本が日本につきつける問題は大きい、ということをもまずは述べておきたい。

このように、近現代を振り返ると、東アジアにおける過去の歴史的生態的均衡が日本の関与によって大きく破壊された事実をふまえながら、本稿では、日本の生態児童文学、なかでも平和や人権を訴える絵本を中心に考察したい。

3. 生態的均衡の破壊を描いた絵本

日本は、人類史上初めて、そして唯一、原子爆弾が実戦に使用され、投下された国である。しかも、「広島」と「長崎」の二か所に投下された。1945年8月のことである。

日本は焼け野原となって敗戦したが、朝鮮戦争による特需を経て、1954年頃から継続的な高度経済成長期を迎え大規模な重化学工業団地（石油化学コンビナート）が建設され、1960年代には深刻な環境破壊と公害が明確な社会問題となった。その代表的な公害事件として「水俣病」がある。

同じく、高度経済成長の陰で、経済効率を優先させたために多数の死者と中毒患者を発生させた食品の安全問題も発生した。乳幼児の身体に深刻な障害を与えた「森永ヒ素ミルク事件」が1955年に生じ、消費者の権利や食の安全性問題の第一号として現在においても論じられている。

「原爆」ばかりか、「公害」「食品安全問題」でも日本は東アジアにおいて、最初にその悲惨さを体験しているのである。近年では、「大地震」「津波」そして「原子力発電所事故」があげられる。

戦争、公害、食品汚染などの社会災害と自然災害。いずれにしても、生態系を破壊し、平和を壊すものである。日本の児童文学作品

の中には、こうした災害を扱った作品も多い。今回は、東アジアで最初の被爆国であり、公害問題、食品汚染問題が生じた日本の災害児童文学作品を紹介したい。

4. 東日本大震災——TSUNAMI

まずは記憶に新しい、東日本大震災を語る絵本からはじめたい。東日本大震災は、2011年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、およびその後の余震により引き起こされた大規模地震災害のことをいう。地震の規模はモーメントマグニチュード (Mw) 9.0で、発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震である。

東京近郊に住む筆者の自宅も相当に揺れ、近所一帯は停電した。信号機が作動しないため交通はマヒした。電話もつながらない。もちろん電車も止まり、ベッドタウンに住む筆者の近所では都心に勤務する人々が帰宅難民となり多くの人が自宅に帰れず職場で一夜を過ごした。

地震発生数時間後にスーパーに出かけると、流通が断絶したため多くの商品が品切れとなり、あれだけ物があふれかえていた日本のスーパーの棚が半日ですっかり空っぽになった風景を初めて見た。そして、電車が数日にわたって不通になってしまったため、多くの人が自家用車に頼ることとなり、給油所には長い列ができた。

震災発生後の東京近郊における筆者の体験を簡単に述べたが、非常食で過ごしたり、停電になったりしたといっても、自宅に特段の被害もなく生活ができただけ非常に恵まれていたのである。

この震災では特に津波の被害が甚大であった。町全体が津波に飲み込まれ、多くの命が犠牲となった地域がある。『ハナミズキのみち』(金の星社、2013)は、そうした地域のなかでも代表的な、岩

手県陸前高田市で息子を失った一人の女性の作品である。

陸前高田市は、350年にわたって植林されてきた約7万本の松の木が茂る景勝地だった。しかし、津波によってほとんどの松の木がなぎ倒され美しい松原は消滅した。さらにそれにとどまらず町のほとんどの建物が津波に飲み込まれ町全体が壊滅的な被害を受け、1000人を超える人々の命を瞬時に奪った。

この震災で、息子を失った作家は、再び津波に襲われたときに、道を見失わずに山へ向かって逃げることができるようにしてほしいという亡き息子の声をまどろみの中で聴いた思いに駆られ、毎年春になると美しい花を咲かせるハナミズキの木が避難の目印になるように植樹活動を始めた。この活動は犠牲者の慰霊と家族を失った人々の心の慰安となったことだろう。

震災後、人々が復興に向けて立ち上がるには大変な力が必要で、人々に力を与えるのは希望であることがよくわかる絵本である。絵本には陸前高田の希望の象徴ともいわれる「奇跡の一本松」も描かれている。景勝地だった陸前高田の松原は津波によってすべて消滅してしまったが、たった一本の松が津波に耐えて立ったままの状態が残った。実は、津波をかぶり、海水に浸食された「奇跡の一本松」はその後枯れてしまうのだが、人々に勇気を与えた「奇跡の一本松」はモニュメントとして加工され現在も陸前高田の復興のシンボルとして人々に希望を与えている。

次に、『はしれ、上へ!』（ポプラ社、2013）を読む。この作品は、



図4 「ハナミズキのみち」2013

町全体が津波に飲み込まれながらも、子どもたちが助け合って命を守った岩手県釜石市の事例を描いている。

海岸からわずか500メートルのところにある釜石東（かまいしひがし）中学校と鶴住居（うのすまい）小学校では、近くに高台もないことから、日頃から万が一の時は山の方向へできるだけ遠く逃げるように防災訓練を行っていた。この訓練が功を奏し、高学年の子どもは低学年の子どもの手を取り、助け合い励ましあうことで、市内の約3000人の子どもたちほぼ全員の命が救われた。この奇跡的な事例は、日頃の防災教育の大切さを雄弁に物語った。

反対に、『ひまわりのおか』（岩崎書店、2012）は、全校生徒108名のうち、74名の尊い命を失ってしまった宮城県石巻市の大川小学校の事例を描いている。上述の釜石市の学校とは対照的に、この小学校は災害時の避難場所として指定されていたことから危機意識に欠け、その気になれば5分で登れる裏山に避難せず、校庭に集合していた全校生徒の大部分の命を失うという悲劇に見舞われてしまった。この悲劇は、東日本大震災がいかにか想定外の天津波を引き起こしたかを証明しているのであるが、石巻市全体における死亡児



図5『はしれ、上へ!』2013



図6『ひまわりのおか』2012

童の約半数が、この大川小学校の児童だったことや、日頃から防災教育を徹底していた釜石市と比較され、天災ではなく人災であると言われた。そして、犠牲となった児童の遺族は市を相手取り訴訟を起こし、裁判所はすぐに避難させなかった学校側の過失を認め、23人の遺族に計14億円の損害賠償の支払いを命じた。

『ひまわりのおか』では、児童たちを直ちに避難させていれば助かったはずの場所である学校のすぐ裏手にある丘の上に、犠牲となった一人一人の子どもたちを想いながら、その母親たちが400本のひまわりを育てる実話を描いた。力強く成長し、太陽を向いて大きな花を咲かせるひまわりを育てることで喪失感を埋めていくのである。失った子どもを育てるように植物に愛情を注ぎ、その力強い成長は、震災の痛手から立ち直るために必要な希望を与えてくれた。

5. 福島第一原子力発電所事故——FUKUSHIMA

ところで、今、東日本大震災に取材した絵本を取り上げながら、災害からの復興に「希望」が力となることを見てきたのであるが、この「希望」という言葉すら奪われた気持ちになってしまう事態が、同じく、2011年3月11日の東日本大震災によって引き起こされた。福島の原子力発電所事故である。1986年4月に起きたチェルノブイリ原子力発電所事故同様、放射性物質の放出をとまなう最悪のレベルの原子力発電所事故である。

いみじくも、その「希望」について問題提起しているのが『希望の牧場』（岩崎書店、2014）である。

原子力発電所から14キロに位置する福島県浪江町のこの牧場は、放射能で汚染された「立ち入り禁止区域」内にある。住民は避難指示が出され、この地域の家畜は行政から殺処分指示が出された。

そんな中で、この絵本の主人公は、避難もせずに400頭近い牛の

世話を続ける。放射能に汚染され、商品価値のなくなった家畜。そんな家畜の世話を続けるのは意味があることなのだろうか。それでも、土地を離れず、黙々と動物の世話を続ける主人公。主人公は、この牧場に「希望の牧場」と名付け、避難することのできない動物たちの世話を続ける。避難所に動物は受け入れてもらえないのである。同じレベルの事故が起きたチェルノブイリでは、30年たった今でも、30キロ圏内は居住が禁止されている。はたして、福島第一原子力発電所から14キロに位置するこの「希望の牧場」に本当に希望はあるのだろうか。

同じように、放射能で汚染された農作物の悲しみを描いた絵本に『ほうれんそうは ないています』（ポプラ社、2014年）がある。

福島県の農作物、および魚介類など海産物は、原子力発電所事故による放射性物質の流出によって汚染されてしまった。目には見えない、においもしない放射性物質によって、大地が汚れ、海が汚れた。土が汚染されるとそこに生えている草が汚染される。草が汚染されると、それを食べる牛が汚染される。牛が汚染されると、牛乳



図7『希望の牧場』2014

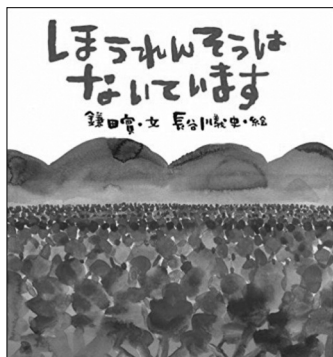


図8『ほうれんそうは ないています』
2014

が汚染されるのだ。チェルノブイリでは汚染された牛乳を飲んだ6000人の子どもたちが甲状腺がんになったという。食物連鎖による汚染の濃縮が原因である。命が繋がっていることを証明している。原子力発電所が置かれたその場所だけに限定された問題ではないのである。生態系が汚染され、そこで生産された食品が社会的に流通することで被害は拡散されていくのである。

6. 公害問題（水俣病）——MINAMATA

地震や津波は、第一次的には、自然による災害といえる。しかし、その自然の災害に起因した福島第一原子力発電所事故とそれによる放射性物質の放出と汚染は、もはや自然災害とは言えず、人間社会がもたらした災害である。この、人間が生み出した産業が生態系に深刻なダメージを与える問題に関しては、日本ではすでに高度経済成長期の1960年代には大きな社会問題となっていた。

日本でもっとも有名な公害事件の筆頭に挙げられるのが、熊本県水俣市の水俣湾岸一帯で発生した「水俣病」である。水俣病は、環境汚染と食物連鎖で起きた人類史上最初の病気である。

大企業の工業排水が水俣湾に大量に排出され、これに含まれていたメチル水銀が魚介類の食物連鎖によって生物濃縮し、汚染されていると知らずに摂取した人々が「メチル水銀中毒症」という中枢神経系に障害が起きる重篤な病に苦し



図9『みなまた海のこえ』1982

んだ。特に、汚染された魚介類を食べた妊婦の胎盤を経由して影響を受けた胎児は、先天的に障害を持って生まれ、高度経済成長の陰で生まれた悲劇として日本では大きく報道された。生態系破壊の悲惨な姿の象徴として記憶されている。

『みなまた海のこえ』（岩崎書店、1982年）は、この恐ろしい生態系破壊の暴力について、産業の発展の犠牲となり、疎外されていった動物たちの怨念を呪術的に描くことで、その悲惨さと過ちを訴えている。

汚染された工業廃水が流されていた水俣湾にはメチル水銀を大量にふくんだヘドロが厚み4メートルもたまっていったといい、水俣病にかかったと認められた人は2000人をこえ、被害を受けた人は1万5000人以上だった。その後485億円もの資金を投じ、水俣湾は埋め立てられ、水俣病の被害は止まったといわれている。被害発生からおよそ40年がたった1997年には熊本県知事が「水俣湾の安全宣言」を行い、現在では魚を釣って食べたり、泳いだりすることもできるようになっているそうだ。水俣市では、水俣病の被害を語りつぎ、こうした公害を二度とおこさないため、世界の環境モデル都市としての努力を続けている。

7. 食品安全問題——森永ヒ素ミルク中毒事件

経済効率を優先した高度経済成長の陰ではまた、深刻な健康被害問題が生じていた。1955年6月頃から主に西日本を中心として、人体に健康被害をもたらす「ヒ素」の混入した森永乳業製の粉ミルクを飲用した乳幼児に多数の死者、中毒患者を出した「森永ヒ素ミルク事件」である。食の安全性が問われた事件の第1号といわれ、現在でも、食品添加物の安全性の問題や、消費者保護の問題で引き合いに出される事例である。

『はせがわくんきらいや』（すばる書房、1976）は、この事件の犠牲者である作者自らが筆を執った作品である。障害者の作品としても注目され、毒物汚染によって虚弱体質となった自身が受けた健康被害やそうした障害を持つ子どもたちに対する社会的差別や偏見を描いている。

水俣病も同様であるが、被害者は、汚染された食物による被害を受けるだけでなく、それによって生じた中毒症状や病身によって社

会的差別という二次的被害も受けるのである。生態系の破壊は、まさに平和な社会や多様な生命の共生からは程遠いことを証明している。

1976年に描かれたこの作品では、食品汚染被害で身体機能が普通の子どもよりもひどく劣ってしまった障害を赤裸々に描き、さらには被害者であるこうした子どもの大変な状況を健常児に正直に嫌いだと言わせている。一緒に遊ぶにはどうにも不自由で「いやだ」「きらいだ」と正直に吐露するクラスメイトであるが、この情けない長谷川君が、体が不自由な代わりに、ピアノなど自分ができる分野で自己実現しようと努力している姿を見たり、長谷川君のお母さんにどうして彼がこんな身体になってしまったのか率直に質問し、食品被害の犠牲であることを告げられ、「仲良くしてね」と頼まれたりしながら、それでも長谷川君があんな不自由な体になってしまったことに釈然としない思いや憤りを感じながら、彼を助け、一



図10 『はせがわくんきらいや』1982

緒に遊ぶ友情が描かれている。

一緒に遊ぶには、手間がかかって面倒くさいから、「きれいや」「きれいや」と子どもたちは正直に口にする。しかし、重要なのは、それでも子どもたちは、この長谷川君の面倒を見るのだし、関心があることである。孤立させないし、関わり合いがある。この、無関心でない、逆に「きれいや」「きれいや」と憤慨する背後にある大いなる関心は、1970年代の日本の人情であって社会的温度であったように思う。「失われた20年」と言われる1990年代～2010年代の日本では、隣人への無関心や子育て放棄、リアリティの欠如したコミュニケーションなどが問題になった。だからこそ、東日本大震災の時には、「絆」が強調されたのである。被災者、被害者を孤立させる、二次的被害である無関心。『はせがわくんきれいや』は、「きれいや」と正直で感情的な言葉を表出しながら逆説的に社会的関心を喚起させ、このような社会的災害が繰り返されないように原因を究明すべきこと、弱者が社会的に排除されないように関心をもって助ける「絆」の大切さを訴える印象的な絵本である。

「長谷川くんなんかきれいや。大だいだいだあいきれい。」という最後の場面の声は、長谷川君をこのような身体にしてしまった汚染された食品、そうした安全でない食品を製造する企業、そのような企業を許す社会が憎いと言っているように私たち大人の読者には聞こえてくる。しかし、子どもたちには、まだまだそのような社会の仕組みは理解できないだろう。釈然としない、行き場のない怒り。しかし、長谷川君を嫌いだと言いながらも懸命に彼を背負い、力強く前を向き歩みを進める子どもの姿に、子どもの読者も、正義を感じ、より良い社会を切り開いていく力と未来への希望を感じるだろう。しかし、大人の読者は、子どもたちに背負わせてしまった大人たちの責任をどこまでも重く感じるに違いない。

8. 原子爆弾——HIROSHIMA・NAGASAKI

ここまで、近年発生した東日本大震災による津波による被害と原子力発電所事故による生態系の汚染からはじまって、約半世紀前の高度経済成長期におきた公害や食品汚染問題について、それらを描いた絵本を中心に紹介してきた。こうしたFUKUSHIMA（原発事故）やMINAMATA（公害）の惨状は世界的に知られている。同じように、あるいはさらに有名なHIROSHIMA・NAGASAKIについても、やはり触れておかねばならないだろう。

第二次世界大戦（太平洋戦争）末期の1945年8月6日午前8時15分、アメリカ軍は日本の広島市に対して世界で初めて核兵器「リトルボーイ」を実戦使用した。これにより当時の広島市の人口34万人のうち、爆心地から1.2kmの範囲内では当日中に50%の人が死亡し、同年12月末までに更に14万人が死亡したと推定されている。

爆発に伴って熱線と放射線、周囲の大気が瞬間的に膨張して強烈な爆風と衝撃波を巻き起こし、その爆風の風速は音速を超えた。爆発の光線と衝撃波から広島などでは原子爆弾のことを「ピカドン」と呼んでいる。

爆心地付近は鉄やガラスも蒸発するほどの高熱に晒され、強烈な熱線により屋外にいた人の全身の皮膚は炭となり、電子レンジに入ったかのように、内臓は高熱で水分が蒸発した。広島街は一瞬にして瓦礫と水気の無い黒焦げの遺骸だ



図11『ひろしまのピカ』1980

けが大量に残された何もない街となってしまった。

『ひろしまのピカ』（小峰書店、1980）は、数ある原爆関連の子どもの本の中でも筆頭に挙げられる作品であろう。「原爆の図」で世界的に有名な丸木位里・丸木俊夫妻が1980年に描いた作品である。一瞬にしてまさに地獄図となってしまった広島をそのままに描いている。

次に挙げられるのは、『絵で読む 広島原爆』（福音館書店、1995）である。本書は〈科学の絵本〉として描かれており、膨大な資料や証言に基づいた写実的な描写に加え、正確なデータに基づいた核兵器の科学的原理や破壊力の実際、放射線被害の実態、障害や疾患の医科学的解説、その後の世界的な原子力開発の問題まで詳細に解説するページも挿入されている。こうした特徴から、本書は科学的な平和教材としての評価も得ている。



図12『広島原爆』1995

一方、絵本としては、原爆投下前の町並みから投下の瞬間、その後の様子が時間の経過に沿って描かれ、最終的には戦後の復興を経て現代に至る広島歴史物語になっている。

ところで、本書には、もう一つ大きな特徴がある。それは、歴史を語るほぼすべての場面に、空に漂う一人の兵士が描かれている点である。おそらくはこの原爆の犠牲となった若い命なのだろう。こうした死者の魂とともに眺める観察記録という枠組みは、感情に訴えることを排し客観的な理解を目的として作られた本作品に、原爆

で失われた無数の命や、そうした人々の日々の生活や人生の重みまでも感じさせる大変重要な意味付与の機能を果たしている。決して他人事や終わってしまった過去のことでない、同じ生活者としての痛みを感じることができるのである。

本書は韓国でも翻訳され、論争となった。広く海外でも翻訳されてきた作品であるだけに、韓国における反応を聞いた日本の出版人は、東アジアにおける日本の加害の歴史について改めて考えさせられた。

最後に、近年刊行された絵本『さがしています』（童心社、2012）を取り上げたい。本書は、現在日本で活躍するアメリカ出身のアーサー・ビナードの作品である。成人してから修得した日本語で詩を書き、日本で文筆家として活躍するばかりでなく、ラジオやテレビ、講演会など幅広い言論表現活動をしている。つまり、原爆を投下した側であるアメリカ人が、詩的な日本語で8月6日を綴った初めての絵本である。

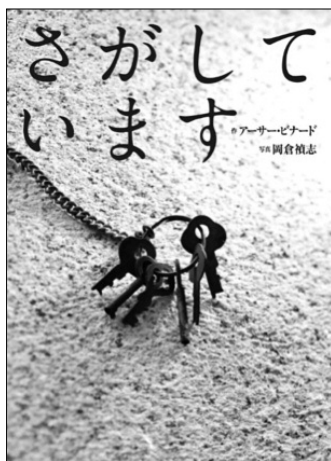


図13 『さがしています』2012

広島平和記念館資料館に保存されている被爆した遺物にあの日を語らせている。原爆が落とされた時間で止まったままの時計を筆頭に、この被爆した物たちは突如としてその平穏な生活を奪われ、自分たちは、どこで何をしていたのか、主人を、記憶を、探している。被写体となって淡々と語る物たちは、戦争が奪う日常の営みを生活者の視点から浮き上がらせてくれる。HIROSHIMA・NAGASAKI

への原爆投下から70年が過ぎた現在、FUKUSHIMAの原子力発電所事故を経験した私たちは、改めてこれらの遺物が語る悲劇に真摯に耳を傾けなくてはならないだろう。

9. 『へいわってすてきだね』——OKINAWA

最後に、近年最も活躍している絵本作家と言ってよい、長谷川義史の絵本を紹介したい。小学一年生の少年の詩を絵本にした『へいわってすてきだね』（ブロンズ新社、2014）である。

本書は、沖縄県平和祈念資料館が募集した「平和のメッセージ」に応募された作品で、沖縄県の離島（与那国島（よなぐにじま））に住む小学一年生の少年の詩の絵本である。2013年6月23日の「沖縄全戦没者追悼式」で少年が朗読し、その素朴さが感動を呼んだ。

「へいわってなにかな。ほくは、かんがえたよ。」で始まるこの詩は、「おともだちとなかよし。かぞくが、げんき。えがおであそぶ。」「ねこがわらう。おなかがいっぱい。やぎがのんびりあるいてる。」「けんかしてもすぐなかなおり。」と続く。長谷川義史のおおらかでのびやかな絵筆と童心に満ちた画面が、少年の素朴でシンプルな詩とマッチしていて心地よい。「みんなのころから、へいわがうまれるんだね。」という少年の言葉をまさに体現している絵本ではないだろうか。そして少年は続ける。「ああ、ほくは、へいわ

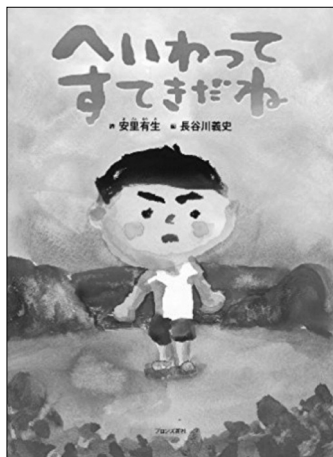


図14 『へいわってすてきだね』2014

なときにうまれてよかったよ。このへいわが、ずっとつづいてほしい。みんなのえがおが、ずっとつづいてほしい。」「へいわなかぞく、へいわな がっこう、へいわな よなぐにじま、へいわな おきなわ、へいわな せかい、へいわってすてきだね。」「これからも、ずっとへいわがつづくようにほくも、ほくのできることからがんばるよ。』

<平和な日本>という国家が出てこないところが良い。家族や学校、地域、そしてそうした生活の場から身の丈で考える世界の平和。「ほくのできることからがんばるよ」と述べる少年の言葉は、何の飾りもないシンプルな言葉でありながら、宝石のように輝く希望の言葉に感じられる。沖縄の汚染されていない自然の輝きと共に読者一人一人の心にダイレクトに響いてくる言葉である。

10. おわりに

以上、2011年の東日本大震災による津波被害、原子力発電所事故からさかのぼり、高度経済成長期の公害・食品汚染による健康被害、そして1945年の原爆まで、日本が経験した生態系破壊とその苦しみを描いた絵本を見てきた。

最後の『へいわってすてきだね』で紹介した少年の非常にシンプルな詩が感動を呼ぶのも、実はその美しい自然の沖縄が、日本で唯一上陸戦が行われた戦場として、20万人といわれる尊い命が失われた悲しい歴史の現場であるからである。戦没者の数で言えば広島原爆よりも多く、さらに敗戦後も1972年までの約30年近い年数をアメリカに占領されていた土地である。

沖縄は現在もその土地の10%を米軍基地が占めている。それに伴って様々な人権侵害問題が起きていることや、新しく米軍基地が建設される計画をめぐって沖縄の貴重な生態系が破壊される危機に

あることなど現在も大きな問題を抱えている。

このように、実際に日本が経験した生態系破壊の痛みに裏付けられた日本の平和絵本を見てきたが、最後に冒頭の「日中韓平和絵本シリーズ」に戻ると、これら日本の平和絵本に欠落していたまた別の歴史があり、物語があり痛みがあるということを改めて思い知らされる。

例えば、最近日本で出版されたばかりの『春姫という名前の赤ちゃん』（童心社、2017）には爆した在日朝鮮人二世の悲しみが描かれている。また、日本が戦後の復興を成し遂げていた陰には朝鮮戦争があり、お腹を空かせた少年がいたことを権正生は『とうきび』（童心社、2017）に描いている。さらには『非武装地帯に春がくると』（童心社、2011）を読んで、南北分断の現実について初めて知ったという読者も多い。これらの作品を通して、隣国でありながらあまりにも無知であった日本の我々に気づくのである。そして、慰安婦を描いた『コッハルモニ（꽃할머니）』は、関係者の努力にもかかわらず、日本で刊行される見通しはまだ立っていないのが現状である。⁷



図15『春姫という名前の赤ちゃん』
2017



図16『とうきび』2016

東アジアの「生態児童文学」という視点から日本の絵本を見てきた。戦争や原爆を描いた1970～80年代の作品に比較して、東日本大震災とそれによる津波や原子力発電所事故を描いた2010年代の絵本は「希望」や「絆」を描いたものばかりであったように、今後の東アジアの絵本や児童文学作品においても、より積極的に「希望」や「絆」を描いた作品が出てくるのではないかと考えている。



図17『非武装地帯に春がくると』2011

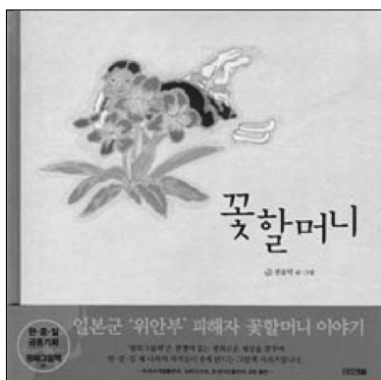


図18『コッハルモニ』韓国版：サゲジヨル出版社、2010年刊行

* 本稿は、2017年5月19日、大韓民国昌原市主催「2017大韓民国昌原市世界児童文学祝典——童心、自然を抱く」（於：昌原コンベンションセンター）、世界児童文学シンポジウム「東アジア児童文学の現況と交流方案」にて、「일본의 생태아동문학——생태계 파괴 (재해, 오염, 전쟁) 를 취제한 작품들에서 (日本の生態児童文学——生態系破壊 (災害、汚染、戦争) に取材

した作品から)」として韓国語で口頭発表した内容を元に、日本語で書き直し加筆したものである。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））、（課題番号：15K02460）による研究成果の一部である。

参考文献

土家由岐雄『かわいそうなぞう』金の星社、1970

長谷川集平『はせがわくんきらいや』すばる書房、1976

高木敏子『ガラスのうさぎ』金の星社、1977

丸木俊『ひろしまのピカ』小峰書店、1980

石牟礼道子文、丸木俊・位里絵『みなまた海のこえ』小峰書店、1982

那須正幹文、西村繁男絵『絵で読む 広島原爆』福音館書店、1995

ひまわりをうえた八人のお母さんと葉方丹文、松成真理子絵『ひまわりのおか』岩崎書店、2012

アーサー・ビナード文、岡倉禎志写真『さがしています』童心社、2012

浅沼ミキ子文、黒井健絵『ハナミズキのみち』金の星社、2013

指田和文、伊藤秀男絵『はしれ！うえへ つなみ、てんでんこ』ポプラ社、2013

うさ絵と文『ぼくは海になった 東日本大震災で消えた小さな命の物語』くもん出版、2014

鎌田實文、長谷川義史絵『ほうれんそうはなっています』ポプラ社、2014

森江都文、吉田尚令絵『希望の牧場』岩崎書店、2014

安里有生文、長谷川義史絵『へいわってすてきだね』ブロンズ新社、2014

クオン・ジョンセン詩、キム・ファンヨン絵、おたけきよみ訳『とうきび』童心社、2016

ピョン・キジャ文、チョン・スングク絵『春姫という名前の赤ちゃん』童心社、2017

-
- ¹ 김옥동 『적색에서 녹색으로——김옥동 생태문학 비평집』 황금알, 2011.6.30
 - ² 2017年5月19日～21日、大韓民国昌原市主催「2017大韓民国昌原市世界児童文学祝典——童心、自然を抱く」（於：昌原コンベンションセンター）
 - ³ 日本では童心社から刊行されている。シリーズの作品は以下の通り。
浜田桂子『へいわって どんなこと?』2011
イ・オクベ作、おおたけきよみ訳『非武装地帯に春がくると』2011
姚紅作、中由美子訳『京劇がきえた日』2011
田島征三『ぼくのこえがきこえますか』2012
田畑精一『さくら』2013
和歌山静子『くつがいく』2013
蔡 皋文・絵、翱子絵、中由美子訳『火城 燃える町～1938』2014
岑 龍作、中由美子訳『父さんたちが生きた日々』2016
クォン・ジョンセン文、キム・ファンヨン絵、おおたけきよみ訳『とうきび』2016
ピョン・キジャ文、チョン・スングク絵『春姫という名前の赤ちゃん』2017
 - ⁴ 例えば、きどのりこ、長谷川潮、西山利佳
 - ⁵ 南北分断：『非武装地帯に春が来ると』（童心社、2011）
朝鮮戦争：『とうきび』（童心社、2016）
広島原爆被爆朝鮮人二世：『春姫という名前の赤ちゃん』（童心社、2017）
 - ⁶ 「日中韓平和絵本シリーズ」を刊行した童心社は、本シリーズの重要な作品として日本軍慰安婦を描いた作品『コッハルモニ（花のおばあさん）』を刊行予定作品一覧に常に掲載してきた。しかし、2017年現在、童心社は『コッハルモニ』の永久出版中止を決定している。
 - ⁷ 2018年1月現在、クラウドファンディングで『コッハルモニ』の翻訳出版資金募集が始まった。市民参加型の出版形態を通して、2018年4月に東京の出版社「ころから」より刊行される予定となっている。

Ready for

探したいキーワードを

プロジェクトを探す プロジェクトを始める クラウドファンディングとは ログイン/新規登録

クラウドファンディングトップ・チャレンジ・このままではお蔵入り、募込額をテーマにした絵本を刊行させたい

このままではお蔵入り。慰安婦をテーマにした絵本を刊行させたい

▼アップ ▼チャレンジ ▼本・漫画・図録 ▼人達 ▼記事

NEXT ISSUE
挑戦中

꽃할머니

募集時 2018

木瀬貴吉 (KorocolorPublishers)

支援総額	1,510,000円
目標金額	1,640,000円
第一目標金額	950,000円
支援者数	161人
残り日数	34日

募入状況 All or Nothing

158%

このプロジェクトを支援する
(※ログインが必要です)

このプロジェクトはAll or nothing形式です。すでに目標金額に達しているため、支援後のキャンセルはできません。5月11日(日)午後11:00まで支援を募集しています。

プロジェクト概要 新着情報 応援コメント

<https://readyfor.jp/projects/kkotalmearni> (2018年2月5日 閲覧)